

日隆の真如論について

米 澤 立 晋

一 問題の所在

真如という概念は、日本のみならず、インド・中国の仏教学において極めて重要な要素の一つであることは先行研究により知られる。⁽¹⁾ 真如とは、サンスクリット語の *tathatā* の漢訳語で、もののあるがままのすがた、如実に知見せられた真なるものともいわれ、英語では *suchness* 等と訳される。大乘仏教では空性、即ち存在の本性が人無我・法無我として、一切の差別相を超えて一であることを真如と称し、如来の法身の身性としている。また唯識法相宗では、円成実性（内的な本性）で虚妄を離れ凝然として諸法は変化せず、万法はすべて第八識の転変であるとされる。さらに伝馬鳴（二―三世紀頃）『大乘起信論』では、真如に不変と随縁の二面を認めて真如縁起を論じ、華嚴宗では事事無礙をもって万法を真如と解している。そして中国天台宗では、性具説を説いて真如そのものに本来的に染浄善惡を具えており、『法華玄義』巻第八⁽²⁾には真如の異名として、実相・妙有・真善妙色・實際・畢

竟空・如如・涅槃・虚空・仏性・如来藏・中実理心・非有非無中道・第一義諦・微妙寂滅の十四種を挙げている。⁽³⁾

こうした真如論が展開される中、鎌倉新仏教の祖師の一人である日蓮（一二二―一二八二）は、その遺文中（真蹟・曾存・直弟写本）において真如についてあまり触れていない。しかし日蓮滅後、日像（一二六九―一三四二）門流の流れを汲み、八品門流の祖とされる慶林坊日隆（一三八五―一四六四）の場合、その著述中において真如の語が散見される。

そこで本稿では、日蓮以前の諸師と日隆の真如論を比較検討することにより、日隆教学の独自性が浮き彫りになるのではないかと思量する。そのための方法論として、まず中国仏教における真如論の展開について概観する。次いで、最澄（七六七―八二三）と徳一（生没年不明）の三一権実論争に注目し、最澄の真如論について確認する。そして、日隆の著述より真如観について考察するものである。

二 中国仏教における真如論の展開

中国仏教における真如論を概観すると、一切衆生悉有仏性か否かということが議論されてきた。まず五世紀中葉、竺道生（一四三四）が闡提成仏を提言したことで、悉有仏性の説が通説となった。しかし、玄奘（六〇二―六六四）による唯識教学に立つ新訳仏教が、『瑜伽師地論』『成唯識論』等に拠って行仏性の立場から五姓各別説を提唱したことで、悉有か一分無性を巡って仏性論争が展開した。

とりわけ『成唯識論』の種子説では、護月（生没年不明）の本有義、難陀（六世紀頃）・勝軍（生没年不明）の新熏義、護法（五三〇―五六一）の合生義が説かれ、「本有無漏種子（悟りを得る因となる種子）」の存在が知られる。これら『成唯識論』の種子説で議論の焦点となっているのは本有無漏種子であり、その理由として、『攝大乘論』『瑜伽論』の存在が指摘される。⁽⁴⁾『瑜伽師地論』では、真如所縁縁（対象としての縁。所縁とは心・心作用の対象という。心・心作用の対象が原因となって、心・心作用という結果が生ずる場合に、心・心作用の対象を所縁縁、心・心作用を増上果という。六因のうち能作因「あるものが生じる時、そのまたげにならないもの」に含まれる）⁽⁵⁾種子と定義し、仏性に近いものとされる。このように、『成唯識論』の種子説は、護月や護法の解釈に従って、真如所縁縁種子を無漏種子に読み替

えることでその解釈を試みたものであると推察する。

一方、地論宗南道派の浄影寺慧遠（五三三―五九二）の流れをくむ靈潤（一六五〇）は、『十四門義』の中で、『瑜伽師地論』の真如所縁縁種子を仏性とみなし、悉有仏性「一切皆成の思想を主張した。また、この立場から真如所縁縁種子を解釈したもののが法宝（六二七―七〇五）『一乘仏性思想論』が挙げられる。法宝は『一乘仏性思想論』『破西方釈真如所縁縁種子』の章において、有漏無漏の一切の諸法は真如から生じるといって真如縁起で捉えることで、真如所縁縁種子も真如から生じると解釈を試みた。法宝の主張に対し、唯識法相宗では、基（六三三―六八二）『瑜伽師地論略纂』、慧沼（六五〇―七一四）『能顯中辺慧日論』、智周（六七八―七三三）『成唯識論演秘』等を根拠として反論したことが知られる。⁽⁷⁾

さらに、中国華嚴宗の法蔵（六四三―七一二）は、『大乘起信論記』『真如有三義』⁽⁸⁾として、如来蔵思想の影響により、不変・随縁の二義を以て心真如門・心生滅門の解説を施している。⁽⁹⁾また、中国天台宗の真如論において、湛然（七一―七八二）は、智顗（五三八―五九七）『法華文句』『從三無住本立一切法』⁽¹⁰⁾以下において無住を理、真如、本淨、不変易とした解釈に加え、法蔵『大乘起信論記』の影響を受け、真如に不変・随縁の語を念頭に入れ解釈を施したことが指摘される。⁽¹¹⁾その根拠として、『止観大意』『万法是真如。由三不

變一故。真如是万法。由「隨緣」故。⁽¹²⁾『金鉅論』「一者示迷元從^レ性變^一。二者示^レ性令^二其改^レ迷^一。」「法華文句記」『隨緣不變理在^二於期^一。』」等が挙げられる。

このように、中国仏教における真如思想は、唯識・法相教と華嚴・天台教学の二つの潮流が看取できる。そして、中国仏教における真如の問題は日本にまで展開され、平安初期の最澄と徳一との間に論争となる。この応酬は三一権実の論議となり教学全般に及ぶが、その基盤は中国で戦われた軌跡上にあり、最澄の論は法宝を根拠とし、徳一は慧沼の論に立脚して論戦が繰り広げられる⁽¹³⁾。そこで次に、最澄と徳一との真如論を巡る論争について確認していく。

三 最澄の真如論

最澄と徳一との三一権実論争の契機については種々の説があり、弘仁七年（八一六）に最澄が『依憑天台宗』を公表し、これが法論の口火となったようである。

そうした中、最澄と徳一の間での論争における真如に関するものとして、真如所縁縁種子と法爾無漏種子が挙げられる。両者は法相教学に端を発し、悟りの原因として立てられた原理である⁽¹⁶⁾。真如についての議論は中国で種々の論争がなされ、最澄は一切皆成の立場より法宝の説を採用し、徳一は五姓各別の立場より慧沼の説を主張する。最澄は『守護国界

章』巻下の中に「救真如所縁縁種子章第四⁽¹⁷⁾」の章を立て、真如を所縁縁とする能縁の智種、すなわち法爾無漏種子であるとする法相教学の主張を批判し、真如がそのまま種子であるという意味で真如所縁縁種子を理解すべきであると定義している⁽¹⁸⁾。一方、『守護国界章』の章末には「真如即所縁縁⁽¹⁹⁾」ともあり、矛盾が生じているとの指摘も挙げられる⁽²⁰⁾。

この矛盾について最澄は、真如隨縁の義であるとした上で、真如隨縁を重要な概念として、自己の教学の中に取り込んだことが理解できる。つまり、真如に不変の属性と隨縁の属性を認め、それは真如の二分を可能にし、不変と隨縁を分けて真如が存在したと推察できる。そう解釈することで、不変真如と隨縁真如という、湛然によつて取り込まれた法蔵教学の援用により、真如所縁縁種子が真如種子であり、同時に所縁縁であるということが分かる。そして、真如所縁縁種子の所縁縁の解釈が、新たな段階を提示しえたことを意味し、最澄の段階で一応の合理的帰結を得ていたことが指摘される⁽²¹⁾。

以上、最澄における真如論について概観してきた。最澄は法宝が主張する一切皆成説を採用した上で、さらに不変真如を所縁縁、隨縁真如を種子と捉えることで真如の定義を明確にしようとしたことが看取できる。なお、最澄は智顗が提唱する一念三千論を離れて真如隨縁論を展開した問題については、最澄は法相宗の凝然真如論と同じ土俵で論戦するために

不変・隨緣真如論に拠ったことが指摘されている。⁽²²⁾

四 日隆の真如論

日蓮遺文中、真蹟・曾存・直弟写本中における「真如」の語は、『守護国家論』『立正観抄』『崇峻天皇御書』等が挙げられる。いずれも『摩訶止観輔行伝弘決』『大乘起信論』の引用に留まる。一方、『立正観抄』では、「伝教大師ノ血脈ニ云ク夫一言ノ妙法トハ者開ニイテ両眼一見ニ五塵ノ境ヲ一時ハ者応ニ隨緣真如ナル。閉ニテ両眼ヲ住ニスル無念一時ハ者当ニ不變真如ナル。」⁽²³⁾「夫尋ニ天台ノ觀法一者於ニ大蘇道場ニ三昧開發セシヨリ已来開レテ目ヲ思ニハハ妙法ニ隨緣真如也。閉レテ目ヲ思ニハハ妙法ニ不變真如也。此兩種ノ真如ハ只一言ノ妙法ニ有リ。」⁽²⁴⁾とあり、隨緣真如・不變真如にまで触れているが、『立正観抄』は真偽未決の状態である。また、所緣緣種子や法爾無漏種子の語もほとんど確認できなかった。⁽²⁵⁾

こうした中、日隆の著述中には、不變真如・隨緣真如の語が散見されるが、日蓮と同様、真如論の中心課題である所緣緣種子や法爾無漏種子の語は管見の限り確認できない。そこで、日隆の著述中における真如の語について概観すると、まず法相宗の真如について解釈する箇所が存在する。

仍て爾前諸經諸宗殊に法相宗等の心は、別教の但理、性各別の旨を

以て、諸法実相世間相常住とは云へども、真如実相其の理独り常住にして、而も真如の理内より緣起緣生する諸法の方は無常なり、故に諸法常住と云ふは真如所依常の得分なり⁽²⁶⁾

日隆によれば、爾前諸經や諸宗・法相宗等の心は、あくまで別教中に說かれる但理（空・仮の二諦を否定して一方的に立てる中諦のこと）は、五姓各別の教えをもつて「諸法実相」や「世間相常住」と說いたものであるとしている。また、真如とは実相であり、理ばかりが常住であつて、真如の理内より緣起緣生（すべての事物は因縁によつて生ずる仮りのものであり、実体をもつて独自に存在するものではない）する諸法の教えは、ありとあらゆるものが常に生滅變化して移り変わり、瞬時として同じ状態にとどまらないことと定義している。すなわち日隆は、法相教学における真如について、五姓各別を主張したものであると解しているようである。

次いで天台宗における真如論については、

而るに一家天台の意も種子新薰の義を不輕品の疏等に積したまへり。而るに名は同、義は大に別なり。其の故は天台の心は真如と万法と別に置かずして万法即真如、真如即万法にして、善惡の諸法悉く隨緣真如緣起常住にして真如の事に顯れ行くを種子新薰とは云ふなり。⁽²⁷⁾

と主張し、天台宗の意は種子は新熏義を採用し、一見、法相教学と同様に思われるが、その義において相違がある。このことは『法華文句』等において解釈され、天台宗では真如と万法を別に置かず、万法は即ち真如・真如は即ち万法であつて、善惡の諸法は随縁真如や縁起常住による。

一方、日隆は『法華經』一品二半と本門八品の間においても不同があるとし、真如論を展開している。

当宗の義に云く、本門八品の要法は五重玄の中には総名なり、一品二半の方は体玄義なり。故に八品の教主は本因本果の報身なり、一品二半の方は教主は法身。八品の辺は事成顕本随縁真如の事円なり。一品二半の辺は理成顕本なり、不變真如の理円なり。八品の辺は信行、一品二半の辺は法行なり。八品の辺は逆化折伏なり、一品二半の辺は順化摂受なり。

ここでは、一品二半と本門八品において、本門八品は五重玄義中、それらを総在した総名であると規定し、一品二半は体玄義の範疇であるとする。また、本門八品の教主は本因本果を備えた報身仏であり、一品二半の教主は法身である。よつて、本門八品の教主は事成顕本であり、随縁真如による仏の化導であるが、一品二半の教主は理成顕本であつて、不變真如の理具一念三千の仏であるとする。すなわち、本門八品に明かされる教えは信行による成仏であり、一品二半では

法行、すなわち悟りの成仏であると主張している。なぜなら、本門八品の立場より見るならば、逆化・折伏の末法の衆生を対象としているが、一品二半では順化・摂受の衆生を対象としているからであると結論づけている。

五 おわりに

以上、中国仏教における真如論の展開から、最澄の真如論、日隆の真如論について検討してきた。中国仏教や三一権実論争における真如の問題は、その多くが一切皆成説と五姓各別説の立場より論じられ、真如所縁縁種子と法爾無漏種子巡る問題が注目できる。

一方、日隆の真如論は諸宗において主張される真如論とは相違が見られ、あくまで『法華經』の立場より真如論を展開してきたことが理解できる。なぜなら、日隆教学の根本は『法華經』本門八品の思想を以て一切の經典を解釈しようという姿勢からもその傾向が窺える。中国仏教や法相教学・天台教学では（當時は末法ではないためか）、あくまで悟りを目的とした真如理解を根底としていた。しかし、日隆は日蓮遺文を基礎として、末法の衆生という自身の機根を十分に自覚し、以信得入による成仏を基底に置き、不變真如・随縁真如を『法華經』を通して解釈することで、成仏への道へと導き出そうと試みたのではないかと思われる。

- 1 主に、赤沼（一九二九）五一七頁以下、常磐（一九三〇）等が挙げられる。
- 2 『大正』第三三卷七八二頁b。
- 3 日蓮宗務院（一九八二）二二九頁。
- 4 吉村（二〇〇六）。
- 5 蓑輪（一九九二）。
- 6 浅田（一九八六）。
- 7 久下（一九八八）。
- 8 『大正』第四四卷二五五頁c。
- 9 山田（一九三五）。
- 10 『大正』第三四卷三七頁c。
- 11 秋田（一九九〇）。
- 12 『大正』第四六卷四六〇頁b。
- 13 『大正』第四六卷七八二頁c。
- 14 『大正』第三四卷二九二頁b。
- 15 久下（一九八八）。
- 16 蓑輪（一九九二）。
- 17 『大正』第七四卷二二四頁a。
- 18 蓑輪（一九九二）。
- 19 『大正』第七四卷二二六頁a。
- 20 蓑輪（一九九二）。
- 21 蓑輪（一九九二）。
- 22 浅井（二〇〇四）。
- 23 『定遺』第一卷八四九頁。
- 24 『定遺』第一卷八五〇頁以下。
- 25 『守護国家論』『定遺』（第一卷九九頁）に、『心地観経』の引用として「法爾無漏種子」の語が確認できる。
- 26 『法華宗本門弘経抄』第四卷一〇頁以下。
- 27 『日隆聖人御聖教』第五卷三三六頁。
- 28 『日隆聖人御聖教』第三卷二二六頁以下。

〈一次文献〉

- 『法華宗本門弘経抄』日蓮聖人御降誕奉讃会、一九七〇—一九七一
- 『日隆聖人御聖教』日隆聖人御聖教刊行会、一九五五—一九八二

〈参考文献〉

- 赤沼智善「起信論の真如に就いて」『大谷学報』第一〇号・第一号、一九二九
- 常磐大定「仏性の研究」丙午出版社、一九三〇
- 日蓮宗事典刊行委員会編『日蓮宗事典』日蓮宗務院、一九八一
- 吉村誠「唯識学派における種子説の解釈について——真如所縁縁種子から無漏種子へ——」『印仏研』第五五卷第一号、二〇〇六
- 蓑輪顕量「最澄の真如理解」『印仏研』第四〇卷第一号、一九九一
- 浅田正博「法宝撰『一乘仏性究竟論』巻第四・第五の両巻について」『龍谷大学仏教文化紀要』第二五号、一九八六
- 久下陸「中日両国に互る仏性論の展開——真如所縁縁種子論争をめぐって——」『仏教大学仏教文化研究所年報』第六号、一九八八
- 山田亮賢「真如随縁思想について」『印仏研』第二卷第一号、一九三五
- 秋田光兆「湛然の真如観」『天台学報』第三三号、一九九〇
- 蓑輪顕量「真如所縁縁種子と法爾無漏種子」『仏教学』第三〇号、一九九一
- 浅井圓道「法華経を中心とした日本仏教——法華経の根本真理の立て方の変化——」『日本仏教総合研究』第二号、二〇〇四
- 〈キーワード〉 法宝、慧沼、最澄、徳一、日蓮、日隆、真如（興隆学林非常勤講師・博士（文学））